

# 都市と景観

特集

本誌では昨年に引き続き今年度も、都市、住まい・生活、環境、エネルギーの分野で特集を組み、その現代的な課題を掘り下げていきたい。

本号で取り上げたテーマは「都市と景観」である。都市の景観とは、まちの“表情”であり、私たち住民がそこにどう住むかという心の姿勢を外に表わしたものである。また、訪れる人をどう迎えるかの心構えも、景観によって伺い知ることができる。国際集客都市を目指す大阪・関西においても、景観の価値はますます高まっている。

ところで、新しい世紀を迎えて本誌の“表情”も一新させていただいた。基本的な編集方針はこれまでと大きく変わらないが、デザインや紙質など時代を反映したものになった。また、全体構成も新たに2部構成とし、前段は特集、後段はCEL所員の研究アウトプット並びにシリーズものを配することとした。

新しいCEL誌にこれまで以上のご支援をお願いしたい。

# CEL

Culture, Energy and Life

## 特集 都市と景観

### I 今、景観の意味を問う

|                                           |       |    |
|-------------------------------------------|-------|----|
| 都市と景観                                     | 田村 明  | 3  |
| 景観と人間 現代都市の景観を生きる                         | 野田 正彰 | 9  |
| 景観がもたらす経済的価値                              | 吉田 順一 | 15 |
| 景観行政から見えてくるもの<br>都市の美顔術からトータルな環境形成への視座    | 倉田 直道 | 20 |
| 個性的景観を生み出すもの<br>近世大阪の町並みに見る               | 増井 正哉 | 26 |
| 建築と景観の関係のデザイン<br>まちづくりにおける個と全体(公と私)の調和の視点 | 森崎 輝行 | 31 |
| 都市再生のグランドデザインと景観                          | 安田 丑作 | 36 |

### II 都市再生へのアプローチ

|                                               |       |    |
|-----------------------------------------------|-------|----|
| 神戸旧居留地の都市景観とまちづくりについて                         | 武田 則明 | 41 |
| 行ってみたい大阪・船場                                   | 篠原 祥  | 46 |
| 京都、文化の基盤としての景観<br>—「価値の共有」を目指した『まちづくり』への取り組み— | 高田 光雄 | 50 |

### III 都市の物語を紡ぐ

|                                                      |                |    |
|------------------------------------------------------|----------------|----|
| 景観の中の物語<br>東豊中第一団地建替計画における地域資源<br>としての樹木・緑地の保全と発展的未来 | 大野 新一<br>浜中 佳澄 | 59 |
| 箕面の山なみ景観保全にみる協働の景観づくり                                | 久 隆浩           | 65 |
| 産業遺産の見えるまち<br>京浜工業地帯の産業遺産の保存と活用                      | 梶 亨            | 71 |

### IV もうひとつの景観

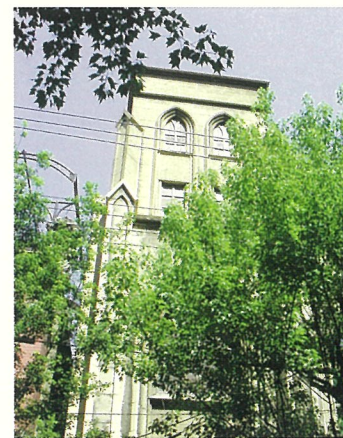
|                                    |       |    |
|------------------------------------|-------|----|
| 都市の夜間景観                            | 近田 玲子 | 77 |
| シビック・サウンドスケープ                      | 平松 幸三 | 82 |
| 都市と福祉<br>もう一つの景観—ユニバーサルデザインの新たな展開— | 田中 直人 | 88 |

#### CEL OUTPUT (都市分野)

|                                |                |    |
|--------------------------------|----------------|----|
| モダンシティー大阪の本格西洋料理<br>—ガスビル食堂物語— | 山下満智子<br>田中 貴子 | 94 |
|--------------------------------|----------------|----|

#### CEL SERIES 大阪再発見 Vol.2

|                                                   |       |     |
|---------------------------------------------------|-------|-----|
| ①大阪の進化を語るミュージアム「此花区」<br>—西成鉄道からユニバーサル・スタジオ・ジャパンへ— | 栗本 智代 | 102 |
| CELからのメッセージ「都市の景観」                                | 安達 純  | 112 |
| From Editor                                       | 石田 通夫 | 117 |



## CONTENTS

SPECIAL EDITION  
TOWN・SCAPEJUNE.2001  
Vol.57



# I 今、景観の意味を問う

## ●都市と景観

田村 明 (都市政策プランナー・法政大学 名誉教授)

## ●景観と人間

現代都市の景観を生きる

野田 正彰 (京都女子大学 現代社会学部 教授)

## ●景観がもたらす経済的価値

吉田 順一 (神戸大学大学院 経営学研究科 教授、社会・経済科学博士)

## ●景観行政から見えてくるもの

都市の美顔術からトータルな環境形成への視座

倉田 直道 (工学院大学 工学部建築都市デザイン学科 教授)

## ●個性的景観を生み出すもの

近世大坂の町並みに見る

増井 正哉 (奈良女子大学 生活環境学部人間環境学科 助教授)

## ●建築と景観の関係のデザイン

まちづくりにおける個と全体 (公と私) の  
調和の視点

森崎 輝行 (建築家)

## ●都市再生のグランドデザインと景観

安田 丑作 (神戸大学 工学部建築学科 教授)



## 都市と景観

written by Akira Tamura

田村 明

### 自然景観と都市景観

「自然は神がつくったが、都市は人間がつくった」といわれる。

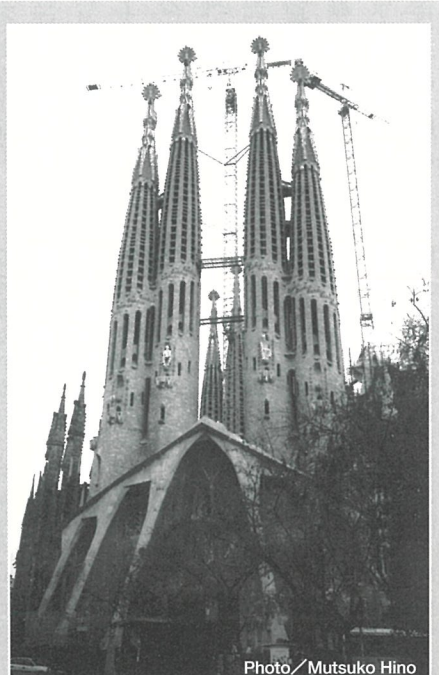
自然の景観は、地球生成以来四六億年もの間に形成されてきたのに対して、都市景観はつい最近、一番長く見ても一万年、せいぜい数千年の間に人類の手で形成された。日本の場合は、奈良・京都などを除くと、僅か数百年の間につくられている。

地球形成から八億年ほどして原始の海が形成され、原始生命も発生し、地球は水の惑星になった。その後現代につながるDNAを持つ生命体が誕生する。生物は水を離れて上陸し、光合成によって森林帯や草原をつくり動植物を育てた。今から三億年前ごろに出現した爬虫類は巨大な恐竜となり地球を支配したが、六五〇〇万年前に突然消えた。

人類の誕生はそのずっと後である。はじめは細々と自然から食物の採取や狩猟で生活していた。やがて、自然に少しばかり手を加えて牧畜や農耕をはじめ、小さな集落をつくった。人類と他の生物との大きな違いは、集団をつくり互いに役割を持って協力しあい、一人ではできない大きな仕事を可能にしたことである。都市もその結果として生まれた。九〇〇〇年以前の古代のエリコは、二メートルほどの高さの石積みほの囲いを巡らしていた。

最も大きく地球の景観を変えてきた生物は植物である。植物により緑の地球となったので、本来の地球とは異なる次元にあるのだが、ここでは地球と植物を含めて広い意味の自然景観として見ておこう。人間に関係なく

形成され、変貌していくからである。人類が都市をつくり文明時代を迎えても、自然の造形活動は止まない。大陸は移動し、地盤は隆起沈降し、気候の変動は海水を増退させる。水や雪や風は地表を削り、堆積させ不思議な景観をつくりだす。そこでつくられた造形の妙は人間には真似できない。人間のつくった優れた造形であるガウディのサグラダ・ファミリアも、バルセロナ近郊の山の形をモデルにしたものである。人間は自然を利用し、その恩恵の中で文明を築いた。人類のつくったものは小さく弱い。自然活動の火山噴火や地震は、一瞬にして都市を破壊する。人間も自然の一部にすぎないと見るのは正しい。それにも拘わらず、人類と他の生物との大きな違いは、自然と異なる次元の都市景観を意図的に創造してきたことである。



ガウディのサグラダ・ファミリア

Photo/Mutsuko Hino



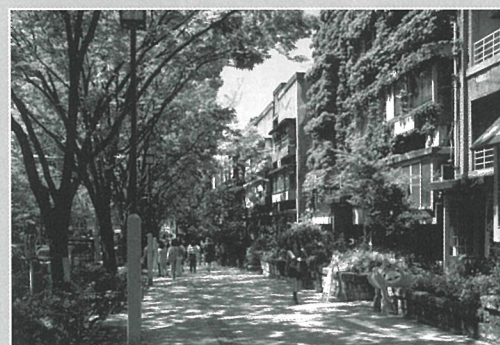
## 人間のつくる都市景観

都市景観に植物や自然を取り込み利用することも多い。大阪造幣局の桜の通り抜けは、大阪にいた頃の楽しみだった。桜は自然だが、多様な桜の開発には人間の手が加わっているし、役所の施設を通り抜けにして市民に開放したのは人間の政策である。これは造幣局のものではあっても、大阪の都市景観の一つだ。アフリカの大地からがっしりと立つバオバブの太木は、最も特色ある自然景観だ。同じ樹木でも明治神宮表参道の桜並木は、新緑の緑、秋の紅葉と美しいが自然そのものではない。神宮建設に当たって全く新たな道路をつくり桜を植えた。東京大空襲ですっかり焼け、周囲には死体が累々としていた。その後再生され、戦後はファッショナブルな通りに変身した人為的な都市景観である。

柳田国男は、天然の名所旧跡といわれているような風景ばかりを愛でるのではなく、人間の手でつくってきた桃畑や梨畑、水力発電所、列車なども新しい風景として認めるべきだと主張した。風景は一部の文人の独占物ではなく、日常の生活活動として新たににつくられる。果樹園、森林、水田、棚田などの美しい景観もそう。人類ははじ

めは自然から身を守り、自然の力を生活のために少しばかり利用する程度で、景観を大きくは変えなかった。それが、現代では巨大な構築技術とエネルギーを手に入れ、自然の動きにも影響を与えるほどになり、地球を温暖化させ氷を溶かし、海中に没する国が出る恐れも出てきた。

都市景観は、様々な人間の営みの総体として、多様な要素により複雑に示される。東京は、戦争の終わった時に一面の焼け野原だった。昭和三〇年代までは茫漠と広がる巨大な村落といわれた。現在は高層ビルが林立する都市景観になっている。高度成長期以来の変化は急激で、人間の手で大きく景観を変えた。それは、新たな感動や希望を呼び起こしたが、また、景観を味気な



表参道



高層ビル群 (大阪)

い無個性の空間に変えることも多かった。経済が貧しかった時代の方が、個性的な都市景観であった例も多い。都市景観は技術や経済だけでなく、人間の知恵と心によって形成される。都市景観という総称を意識せずに、個別活動に任せ、適切な施策もなければ、巨額の資金は景観形成にマイナスになることさえある。

開放経済以来の中国の変化は激しい。この十数年の間に上海は高層ビルが建ち並び巨大なタワーや橋が建設され都市景観を一変させた。だが孔子の里、曲阜では人道的に建物の高さを制限している。ホテルは大屋根のある二階建、町の建物は孔子廟のような特殊な古い建築物の他は一〇メートルを越えない。町は孔子に相応しい雰囲気と景観を維持している。どの都市景観がよいか悪いかは簡単にはいえないが、どれも人間のつくったものである。個人が独りよがりで行動するのではなく、都市ごとに都市景観の認識を持って行動するならば、様々な個性を持つ多様な景観が形成され、

人々を感動させるはずである。

欧米の都市では、教会や市庁舎などを除いては、ある高さで抑えている都市が多い。オレンジの薨の波の上に浮かぶように立っていたフィレンツェの花の聖母寺は印象的だ。もし家並みの高さや色がバラバラだったら、せっかくの景観は支離滅裂になっていただろう。シドニーの都市景観は、ハーバーブリッジとオペラハウスで際だっていて、オペラハウスは予算が膨大に膨らみ、何度か事業が危ぶまれたが、結果は個性的で質の高い投資になった。個体としての建築物よりも、立地する岬、隣の広大な植物園の緑、ブリッジとの対比、背後の高層ビル群、海の色と浮かぶヨットを含めた全体の都市景観が素晴らしい。

優れた都市景観は、何となく出来上がっているのではなく、そこに働く人間の技術や経済や政治や制度や市民意識の総和、人間の知恵と配慮により決まり、自然景観とは全く異なる形成の仕方をするものである。

## トータルな存在としての都市景観

少し難しく言えば、景観とは「人間が地表のまとまった地域をトータルに捉えた認識像」である。視覚がその中心だが、他の五感全体を含めて認識する像である。存在する

だけで意識もしないものは景観とはいえないし、また建築とか橋などを一つだけ取り上げ、全体として捉えなければ都市景観認識ではない。都市景観は、はじめからあった自然の山や川、地形、植生を、人工的に加工したり多様な人工物を加えて形成された集合体である。それは地域から切り離すことができないし、地域の固有性を持っている。

都市景観の主要な要素は人間のつくる構造物だが、そこに自然も織り込んだ。北斎の富嶽三十六景には江戸の都市景観として富士山が描かれる。広重の有名な駿河町の絵では、町の通りの向こうに実際よりも大きな富士がある。江戸人の意識では、一〇キロ先にある富士山は欠かすことはできない江戸の都市景観で、町名も駿河町といった。九〇〇メートルに足りない高さの筑波山も、江戸には馴染みの景観だった、鹿兒島の桜島は灰を降らす迷惑な存在だが、これがない鹿兒島の景観は考えられない。

大阪に住んでいた頃、会社の窓から六甲が見え、反対側からは生駒・信貴の山並みがすぐ近くに見えた。東京と違い山がこんなに大都市の近くにあると感激したが、大阪の都市づくりでは、こうした山を都市景観として捉える意識は薄かったように見える。スイスのツェルマットの街並みから見るマッターホルンは間近で、町の景観をつくる。南アフリカのケープタウンは上が平ら

なテーブルマウンテンの真下にある。マッターホルンとは対照的な形だが、これも都市景観には欠かせない。有名な山でなくてもよい。京都の東山の峰々はなだらかで、ひとつひとつに特色はないが、全体として緑の屏風の都市景観として意識されている。小さな丘が町の景観のポイントになることもある。

身近な都市景観をつくる自然の要素として、山や丘の他に欠かせないのは川、海、湖である。大都市には大抵大河が流れている。ロンドンのテームス川、パリのセーヌ川、モスコートのモスコフ川などが重要な都市景観として扱われている。大きな川は広い開けた空間をつくり、他の構造物などを含め都市を全体として捉える舞台になっている。スイスの都市はチューリッヒ湖、レマン湖など湖が景観の中心だ。特にルツェルンでは、湖から流れ出る川にかかる長さ二〇〇メートルの木造のカペル橋は、一三世紀に防衛目的でつくられたが、今では個性的な都市景観のカナメとして印象的だ。こういう話はキリがないが、重要なことは、優れて個性的な都市景観は多様な要素で成り立ち、自然の要素も十分に組み込んでいくことである。それに対して東京の隅田川は、美しい橋などの優れた要素も多数つくりながら、少々乱暴で全体の景観形成はできていない。都市景観として十分に意識していなければ、どんな景観要素もその効果





隅田川景観

を發揮しない。

自然は都市景観の基盤だが、それを人間が大きく変造して優れた都市景観をつくりだす例もある。ベネチアも元の自然は、浅瀬や小島が幾つか点在するだけだったが、土を上げ大小の運河を開き、密集した建築や広場や橋をつくった。自然はほとんど変えたが最高に利用され、時間をかけて優れた都市景観をつくりだした。最も優れたサンマルコ広場の景観は、今から一二〇〇年ほど前から約千年の間に、新しい建築物や塔を建設し、改変していった結果である。はじめは広場はないし、今の景観を想定したり設計したわけではない。その時々の人々が全体を考え、優れたセンスがあり、歴史の中で最高の景観をつくり上げた。一人の設計者がつくるのは、一、二の建造物がせいぜいであろう。都市景観は多様な要素を持ち、多くの主体が関わり、様々な時

代の多くの知恵が重なり統合されてゆく。長い時間の間に、多くの人々の力が有効に組み合わさって優れたものになった。

## 誰が都市景観をつくるのか

絶対王政の時代には、いわゆるバロック都市計画が行われ、ルイ十四世はベルサイユを、ナポレオン三世はオスマンとパリをつくった。大きな権力は豪華な都市景観を形成した。だが、現代は強力な政府が全てを造り上げるのではなく、多くの事業主体や関係者が協力して都市を形成してゆく時代である。それぞれの主体に個別の目的があっても、互いに協働して都市景観を仕上げていくことだ。一時的に優れた景観をつくっても、その価値を意識せず、利己的行為を個別に重ねれば、やがて景観は崩れバラバラになってしまう。都市景観は生きており、常に変動している。景観を向上させ、維持していくのは次の時代に委ねられる。いつも全体の都市景観に関心を持つ人々がいて、適切な手当て施策をしなければ、その形成も維持できない。

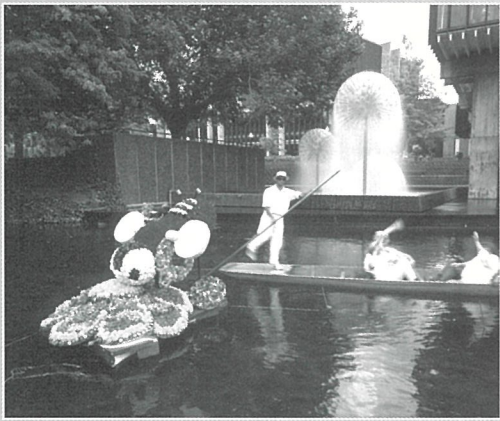
これまでの日本の都市づくり、特に戦後は都市景観という観点が全く欠乏していた。諸外国を訪れて個性的な都市景観に触れ、何故日本の都市はこうもバラバラで、景観

が崩れているのかと気が付く人も多くなってきた。それは、国の制度の欠陥、自治体の自立性の希薄、個別利益追求の優先、市民の関心の薄さなどの複合した結果である。三〇年以上前に、民間から横浜市の職員になった私は美しく個性的な都市景観づくりを主張したが、国にとんでもないと拒否された。早く安くものをつくれればよいというのが、法律や資金で全国の都市計画を統制する建設省だった。それから十数年たち国も考えを改め、都市を美しくする補助金も出している。しかし、中央がバラバラに所管施設を援助しても、都市景観は個別の事業の寄せ集めではなく、都市全体を考えなければ形成することはできない。

都市景観は、その地域の土地の上に形成されるもので、これに関わる関係主体の協働に依らなくては生まれない。他からの押しつけや真似でできるものではない。一人の傑出した人物や権力者のものではなく、分かりやすく言えば「市民の共同作品」である。その意識が生まれてこなければ、たちまち、バラバラになってしまう。エーゲ海に浮かぶミコノス島は、青い海に真っ白に統一された家が印象的だ。その景観を維持するために、住民たちはいつも自分たちで石灰水を塗っている。共同作品をつくるには、市民が分にに応じて責任を持って行動するのが大前提である。市民意識が育ちにくいと言われるが、身近な景観に共同の関心

と責任を持つことから市民意識は生まれる。個々の市民や企業には多様な欲望や展望があるだろうが、そのままでは共同作品にはならない。まず市民が共通に認識し共感できる都市のイメージが必要だし、実現のためのルールやその他の手法も必要になる。それには、地域に密着した基礎自治体が市民の共同政府として働き、ここにアーバンデザインのチームを持つことが有効だ。

アーバンデザインとは、一人が都市をデザインすることではなく、都市景観を形成してゆかための様々な方策を立て、市民とともに具体的に実践していく仕事である。アーバンデザインは都市の表面的な化粧術ではない。厚化粧をするとかえって都市の個性を殺す。景観を整えるには、目に見えにくい基本的な土地利用や都市構造をしつかりさせ、文化性を高め、必要なルールをつくり守られているのが前提である。化粧の前に健康や教養が大事だという意味だ。また、それぞれの都市の持つ個性を引き出すことである。ルールや方向を決め、個々の事業を共同作品の観点から調節し、マイナスを排除し、時には先導的な質の高い事業をプロデュースする。基礎自治体はまとまった区域を持ち、市民に密着して総合的に考えられる単位だから、共同作品の作成に大事な役割を果たすだろう。ようやく先覚的な自治体では都市景観を考える部署が生まれ、さらなる充実が期待されている。



クライストチャーチ花の祭

都市景観は市民が共同して形成するものだから、市民が育たなければ成立しないわけだ。市民が都市を意識できるのは、まず身の周りの景観からで、個性的で誇れる都市景観があれば市民意識を育てるだろう。近年、市民参加が主張されているが、景観づくりは最も実践的で分かりやすい市民参加になる。欧米の都市では、道路から後退して建物を建て、前庭に美しい花などを個人が植えることが多い。それが通り全体としての景観になる。誰から命令されたわけでもないのに、個人の楽しみが集積して共同作品としての都市景観をつくっていく。ニュージーランドのクライストチャーチは、花の町として有名だ。個人個人が美しい庭づくりに励み、一年二回コンクールが行わ

れる。数軒が共同してストリートとしてのコンクール参加もある。工場も通りに面して広い芝生をつくり、美しく花を植え、都市景観を美しく向上させることに協力している。都市景観は多くの主体の力で美しい共同作品になっている。こうした都市では人も優しい。信号のない横断歩道に立っていると、大きなトラックが黙って止まり、歩行者を優先させる。

## 都市景観の大切さ—よりよい景観をつくるために

都市景観は万人に開放され、都市を知る一番の早道だ。いわば都市の顔だから、景観を見れば都市のおよその状況が分かる。人間四〇歳になったら自分の顔に責任があるというが、都市の命はもっと長く、その顔に責任があるのは当然だ。魅力的な景観は、市民が都市を愛し、自治体も良好な施策を行い、経済活動も順調であることを示すだろう。

何故、今日特に都市景観が問われるのか。現代の国際時代、分権時代は都市間競争の時代になる。景観が魅力的なら都市の評価を高め、知名度を上げ、人や企業を引きつける。それは観光都市はもちろん、様々な都市間競争にも効果を上げる。サンアントニオは、かつて氾濫を繰り返した川に沿っ



て、人間的な楽しく歩けるプロムナードをつくった。その景観は安らぎを覚えさせ、人を誘い、多くの企業や国際会議の誘致に成功した。

このような経済効果もあるのだが、もっと本質に遡れば、現代都市が個性を失い、機能性ばかりを重視して無機的になったのを、人間的な都市に再生させるためである。乱雑な景観は、市民の心を冷たく無関心にさせる。都市が美しく、個性と魅力とを備えた潤いがあれば、市民意識が芽生え、自分以外の環境や景観にも目を向けるようになるだろう。しかも、市民がそこに参加し貢献できれば、生きる喜びを感じ、都市の活力になる。そうなるのは、子供のうちから景観を含めた環境教育を行い、身の回り全体への関心を高めていくことが必要だ。景観形成には画一的な美学や基準があるわけではない。市民意識があり、都市への愛情と責任を持つ人々が育ち、ココロを持って協働して多くの工夫を実践することによって形成される。

さらに、都市景観は市民に自信と誇りを呼び戻す。それが都市の魂になることもある。第二次大戦でナチスドイツはポーランド人を根底から打ち砕くために、市民の誇りであるワルシャワの旧市街を故意に破壊した。一方、ポーランド人たちは、旧市街の中心広場の図面や絵を密かに保管し、ナチが撤退するや、まだ戦後の厳しい時代に



ワルシャワの旧市街地

真つ先に中心広場の完全な復元を行った。一九世紀の都市景観は、ワルシャワの存在証明であり、都市の魂であった。打ちひしがれたポーランド人は再び自分たちの歴史や文化への誇りを回復した。

都市景観は大事に棚に上げて飾っておくものではない。それは市民が生きて日常を送る舞台であり、その舞台を市民にとって有効に使いこなしていく知恵が必要になる。「まちづくり」というのはハードだけでなく、それに相応しいソフトがあつて初めて意味を持つ。「まちづくり」は「まちづかい」だと言ってもいいだろう。

都市景観は遠望もできるし、車からも見られるが、基本は歩行者の目からのものである。手触り感覚で心から景観を認識できるのは、人間が歩いている時だ。時に立ち止まり、しばし景観に浸ることもできる。車社会では人が軽視されてきたが、歩行者

空間は人間が中心で、キメ細かい優しさやしき潤いを育て、都市景観形成の中心になる。そこに緑や花や水辺やアートなどの要素を加え、人間の心に語りかけてくる景観を育てたい。

都市景観が個性的、人間的、魅力的になり、歴史性や自然性も取り込めれば、市民が「この都市に住んでいてよかった」と生きる喜びを体感できるだろう。時には壮大な景観、荘重な景観もよいが、市民の都市としては心の安らぎを覚える景観、心に染み入る景観、心に残る景観を育てていくべきだ。人間は協働して都市をつくることにより現在の文明をつくってきたのだが、その反面では、自分しか考えない利己性を生み、争いや戦争を起こし、やがて社会や人類文明までも破壊してしまう恐れも出てきた。美しい個性的な都市景観は、人間が意識し、協働することで初めて創出できる。平和を求め、和み、安らぎ、心に染み入る景観を自分たちで生み出すことができれば、対立抗争を繰り返すよりも協力し合うこそが、人間の本来の姿だと実感でき、未来に希望を持てる証となるであろう。

（都市政策プランナー・法政大学 名誉教授）

#### 参考文献

- 田村明「美しい都市景観をつくるアーバンデザイン」(朝日新聞社)
- 田村明「都市の個性とはなにか」(岩波書店)

## 景観と人間

現代都市の景観を生きる

written by Masaki Noda

野田 正彰

事物は人間に見られているか否かにかかわらず、存在している、だが私たちは事物を見つめ感じるによって、事物の存在を確認し、同時に解釈し関係をもつ。私たちが外界を眺める時、生まれてからの永い外界との交渉の歴史をもって事物を解釈している。

それでは、人間の精神はいかにして作られるのだろうか。精神の形成において、外界、とりわけ景観はどのように位置づけられるのだろうか。

### 対人関係と心

私たち人間は、まず霊長類の新人(ホモ・サピエンス・サピエンス)としての大脳や身体をもち、両親から遺伝情報を受け継いでいる。そして生まれるとすぐ、母と子との

交渉を通じて、これから生きていく社会での人間関係の取り方、自己表現の望ましい形、相互理解の道筋を習得し始める。母親は一对一の関係で、自分の個性を伝えるとともに、彼女が生きている社会の文化を伝えていく。言葉以前のちよつとした眼差し、仕草によっても、彼女の背後にある文化を伝えて止まない。

例えば誕生したばかりの赤ちゃんは眼も見えず、母親を特定した愛情をもっているわけではない。ただし赤ちゃんは、時々手足を内側に痙攣させる律動をもっている。手足をピクピクッとさせる単なる運動神経系のリズムであるが、赤ちゃんを抱いていた母親にとっては、赤ちゃんが自分にしがみつく愛情表現に受け取る。ピクッと抱きつかれたと思つた母親は、赤ちゃんをギュッと抱きしめる。こうして生物学的にプログ

ラムされた律動は、赤ちゃんは母親の愛情形成に読み替えられていく。

その後成長していくにしたがい、赤ちゃんが安らいだ表情でふと手足を激しく突っ張ると、今日の攻撃的・競争的社会に生きる母親は、たとえ彼女が上品で優しい人であっても、あるいはそうであればこそ、にっこり顔笑み、しっかりと抱きしめる。母親は何げない赤ちゃんの動作に、我が子の積極性、活動性を読みとり、勝手に喜んでいく。快く抱きしめられた赤ちゃんは、元気に突っ張るとギュッと抱きしめられる快感を繰り返して学習している。おとなしく、静かにじっとしているよりも、ほどほどに暴れることが、攻撃的社会ではプラスに評価されることを幼い頭に焼き付ける。

この時点から、個別の人間の精神形成が

